

現代俳句と古典

飯塚 ひろし

小林一茶

一茶は俳諧の世界に、生まれるべくして生まれた栄光のピエロであった。一茶がパロディによって立つ作家と称しても過言ではない。パロディの「だし」はユーモアであり、「薬味」はアイロニーである。一茶のユーモアとアイロニーの匙加減は、まさに芭蕉直伝の辛口と言える。俳諧と言え、芭蕉、蕪村、一茶と合言葉のように挙げられるが、これは大正時代になってからの事である。

やれ打つな蠅が手をすり足をする 一茶

一茶の作品には、人口に膾炙しているものが多い。それは平易・平明で覚え易く有名になったのであろう。この作品も有名な俳諧。蠅の前肢や後肢をすり合わせる仕草が「拝んで命乞い」をしている姿に、一茶は「はつ」として蠅を打つ手を止めた。「やれ打つな」は一茶が自分に呼び掛けた言葉。吹けば飛ぶような蠅が人間に命乞いをするとは、滑稽でありまた哀れでもある。

淋しさに飯をくふ也秋の風 一茶

淋しさの余りに、飯で腹を充たそうとする男は一茶自身である。「淋しさ」と「秋風」とは、余りにも即き過ぎだが、「飯をくふ」と言う趣の違う措辞が人々の笑いを誘う。笑った後にくる淋しさは、人間の深い処に存

在する。この作品は大いに笑えるが、この様な境遇の高齢者は多い。笑いとペースのある趣深い作品である。

是がまあつひの栖か雪五尺 一茶

信濃の豪雪を恨んでいる様な作品。自分の育った土地とは言え、江戸暮らしが長かった一茶にしては無理もない。一茶の心中には諦観と悟りとが渦巻く。「つひの栖」とは自嘲ともとれるが、豪雪を楽しんでいる様子でもある。まるで一茶が世捨て人の如くで、自らを笑い飛ばしているが、そこには淋しさと一茶の嘆きが聞かれる。

正岡子規

俳句の歴史は、明治二十年代後半に始まる極めて新しいものである。俳句の始まりは、子規が我が国に「俳句」を発生させ、俳壇をもって全国に普及せしめた事にある。子規の俳句を語るとき、誰しも「写生」を一番に挙げる。しかし、子規の俳句は写生のみでなく多義に亙っている。何を読むにしても、子規は対象の質感に正確に迫っている。それが子規独特の句境を生み、写生が己の心を表現する独自の世界を作り上げた。子規にもユーモラス句が多くあり、読んでいて楽しい。

(次号に続く)